書　　評

下條尚志.『戦争と難民―メコンデルタ多民族社会のオーラル・ヒストリー』風響社，2016 年，68 p.

笹川秀夫 *

東南アジアの文化，歴史，政治などを検討するにあたって，民族を論じることの重要性は，言を俟たない．ある国民国家のなかで多数派を占める民族を取り上げるのも有益だろうが，少数者に注目したからこそみえてくることも，もちろん多い．また，東南アジア大陸部では，特定の国民国家のなかでは「少数民族」と扱われるものの，国境を越えると隣国では多数派となる民族集団も，いくつか存在する．たとえば，東北タイのラーオ人や，タイ＝マレーシア国境地帯のマレー系タイ国民とタイ系マレーシア国民などが，こうした例として挙げられる．本書で扱われているメコンデルタのクメール人も，ベトナムでは「少数民族」である一方，隣国カンボジアでは多数派の民族となる存在である．

こうしたクメール人が住民の多数を占めるのに加え，本書の調査地ではベト人（キン人）すなわちベトナムの多数民族や，華人の存在も考慮に入れる必要がある．しかも，それぞれの民族帰属を固定的なものとみなすのではなく，社会変動や戦乱のなかで，民族間関係や民族帰属認識がどのように変遷してきたかを論じることが重要というのが，本書を貫く主張といえよう．以下，本書の概要を紹介する．

まず，序に相当する「はじめに」では，本書で扱うメコンデルタという地域がたどった近現代史が概観され，戦争や紛争，経済的困窮が原因で難民を生み出してきた地域であることが指摘される．そして，調査地であるソクチャン省が，ベトナムでは少数民族であるものの，隣国カンボジアでは最大民族となるクメール人，そのほか華人，ベト人からなる多民族社会であることが示されている．

第一節では，序で提示された民族構成が固定的なものではなく，実際には可変的で重層的であることが論じられている．すなわち，調査地の民族構成に関する公式の統計では，クメール人が 79%，ベト人が 19%，華人が 2%とされるが，混血者の存在や公的支援を目的とした民族登録の選択などから，人々の民族意識を単純に量で測ることは困難であるという．また，多言語の使用が一般的であり，年齢，職業，学歴などによって使用する言語が選択される状況が提示されている．宗教に関しても，クメール系の上座仏教 2ヵ寺が最も多くの信者を集めているものの，信者には「混血」を自任する人々も含まれ，クメール人であればカンボジアとの関係，華人であれば中華世界との関係だけで，調査地の民族や文化を理解することはできないという．

つづく第二節では，フランスによる植民地化による社会変動の結果，調査地がどのように人々を受け入れてきたかが論じられている．19 世紀後半からの植民地化による開発の進展を契機として，農民の流入によって人

* 立命館アジア太平洋大学アジア太平洋学部

口が増加した．その結果，農地開拓，市場町の形成，「混血」化といった変化が生じ，蓄財に成功した移住者が上座仏教寺院の庇護者になっていった過程が示される．また，1946～1954 年のインドシナ戦争により，クメール人が流入するようになった．しかも，フランス軍とベトミンとの戦闘のために，クメール人はフランス軍兵士，ベト人はベトミンと，調査地の住民自身が認識するようになり，帰属の曖昧さや多重性が許されなくなった状況が描かれている．

第三節は，ベトナム戦争以降もつづいた戦乱によって，民族的な帰属が再び政治争点化したことや，「難民」が生み出されたことを描いている．1975 年にカンボジアで成立したポル・ポト政権によるベトナム侵攻と，ポル・ポト政権を崩壊させたベトナム軍のカンボジア侵攻に起因する 1979 年の中越戦争が，調査地でもクメール人と華人を政治的に微妙な立場に置くことになった．華人や華人との「混血」は「資産階級」とみなされ，公安警察が用意した船で「難民」として国外脱出を図る者がいた一方，ベトナム国内に残った人々も「ベト人」として民族を登録するという対応をみせた．その後，社会主義政策の軌道修正が進み，自由市場価格や生産物請負制が認められるようになると，1980 年頃から私営の精米所を建てるなど，国外脱出した人々の空白を埋めるような経済活動に取り組む者も現れたという．他方のクメール人も，ポル・ポト政権のベトナム侵攻により疑いの目を向けられるようになり，戦場となった国境地帯のチトン県から調査地へとクメール人が疎開させられる事態も発生した．こうした移住者のなかにも，調査地に定住して農地を集積したり，魚醤を売買する人々が現れた．このように，1970 年代の戦争，国家間関係の変化，社会主義政策の推移によって，経済活動の再開や社会関係の再編がみられたことが論じられている．

第四節は，現在の調査地におけるヒト，モノ，情報の流れを検討し，ベトナム政府による規制が強まる一方，規制をかいくぐろうとする地域住民の対応策を論じている．まずヒトの流れについては，戦乱などにより国外に流出した人々も，故郷との縁や紐帯を維持しつづけ，経済的な機会や困窮への支援に紐帯を利用していることが示される．モノの流れのなかでは，ベトナム政府の政策を批判するクメール人の民族主義者による書籍などがカンボジアから流入することが厳しく警戒されており，仏典や僧衣など仏教関係の品も輸入には煩雑な手続きが必要になっている．そこで，行政文書の作成に求められるベトナム語の識字能力や行政手続きの知識をもつ人物が媒介者として活躍する場が開かれたことが示されている．ただし，こうした媒介者の立場も，微妙な民族間関係の均衡のうえに成り立っていると論じている．情報については，ベトナムとカンボジアとの間を行き来する人々がもたらす情報に加え，ラジオ，衛星テレビ，インターネットという順で地域住民がカンボジアやタイのメディアにアクセスする手段を確保してきたことが述べられている．ただし，こうした情報の収集についても，ベトナム政府の規制が強まっている状況が提示

されている．

結論に相当する「おわりに」では，戦争や動乱に翻弄された人々を「難民」などと一括りにとらえ，一面的なイメージを付与することの問題点が指摘されている．戦時下や政治経済的に危機的な状況にあっても，人々は地域社会を再編し，不安定な状況を安定させることを試みてきた．移動する人々を受け入れ，言語や宗教にまつわる複数の価値観が併存しており，民族的な帰属認識が折衷している混交的な多民族社会は，国家にとっては忠誠心が疑わしい存在となりうる．しかし，こうした多民族社会を生きる人々の存在が，紛争の発生を防ぐ最善の策ともなりうるのではないかという見通しで本書が閉じられている．

以下，本書の学術的な貢献を評者なりに考えてみたい．まずは，調査が容易とは思えない地域で，長期間の住み込みによってデータを収集し提示したことが挙げられよう．本書でも示されているとおり，メコンデルタ出身のクメール人には，カンボジアに移住してベトナム政府による少数民族政策や人権抑圧を批判する活動をつづけている人々がいる．したがって，ベトナムのなかでもクメール人が多く住む地域は，「ぜひ調査してください」と外国人研究者に開かれた場所でないだろうことは，想像に難くない．こうした地域で厚みのあるデータを収集して提示したことは，ベトナム研究にとって，そして評者が専門とするカンボジア研究にとっても，きわめて有益といえよう．

また，本稿の冒頭でも触れたように，特定の国民国家では「少数民族」と扱われる民族集団が，国境を越えて隣国に行けば多数派の民族となる地域での調査に成功したという点が，東南アジア研究への貢献として挙げられる．本書は，外部者が民族的な帰属や文化を安易に個々の国民国家に結び付けることを戒めている．一方で，平時には民族認識が流動的で重層的であることを示しつつも，戦乱などを契機に地域の住民自身も帰属を特定の国民国家と関連づけて把握せざるを得なくなる状況が生じることを提示している点も興味深い．

こうした民族的な帰属や民族認識の変化は，昨今の華人研究での議論にも貢献しうると考えられる．すなわち，これまでの華人研究が，まずは「華人らしさ」を探すことに終始し，つづいて「華人らしくなさ」を探すことに一生懸命になってきた傾向に対し，いずれも「初めに結論ありき」という問題を抱えているのではないかという近年の批判的な研究動向である．混血者の存在や，戦略的な民族登録の選択を具体的なデータで示している本書は，ベトナム以外の華人を専門とする研究者にも，ぜひ読んでもらいたい一冊といえる．

最後に書評の「お作法」として，今後の研究や成果公開に向けた「注文」を少々記しておきたい．まず，本書の最後に書かれているような，混交的な多民族社会が紛争の防止につながるのではないかという見通しは，少々言い過ぎと感じた．本書で提示されているデータ自体が，戦乱によって地域住民自身が国民国家を意識せざるを得ないことを示している．紛争の防止という明るい見通しは抱け

なくとも，実際に紛争や戦争に巻き込まれてしまった場合に，人々がどのように社会を再編し，安定化させるかという点で，さらなる議論や結論づけができたように思われる．

また，評者が専門とするカンボジア国内，とくにカンボジア国立公文書館には，メコンデルタのクメール人に関する資料が，植民地期を中心に手つかずのまま数多く保存されている．植民地期には，カンボジアとメコンデルタ，さらにはラオスの上座仏教を結び付ける政策が実施された．その後カンボジアでは，1953 年の独立後に僧侶向けの教育組織などの改組や名称変更がみられたが，本書でも取り上げられているチトンの上座仏教寺院を評者が訪れたところ，植民地期に制定されたパーリ語学校などの名称が現在でも使われている状況を目にすることができた．今後は，フランス語による文献資料なども活用することで，さらに研究に厚みを増すことができると思われる．著者による今後の研究に期待したい．

小馬　徹．『「統治者なき社会」と統治―キプシギス民族の近代と前近代を中心に』神奈川大学出版会，2017 年，256 p.

石井洋子 *

2013 年 12 月，ケニアの独立 50 周年が各地で盛大に祝われ，19 世紀末から 70 年近くつづいたイギリス植民地政府からの完全なる脱却とケニアの未来を展望する，さまざまなイベントが繰り広げられた．しかし，ケニアの諸民族は近代化のプロセスをうまく乗りこなし，ネーション・ステートをスムーズに実現したのだろうか．そうとはいいがたい．本書は，キプシギス人が経験した「植民地化」と「脱植民地化」という二大局面に注目して，無文字社会を生きた人びとが外側から強制された識字的なシステムに否応なく「包摂」され，それにどう適応して社会をまとめ上げようとしたのか，その努力や苦難を歴史的観点から描くことを狙いとしている．

キプシギス人とは，南西ケニアに暮らす南ナイル語系の農牧民であり，年齢組織によって強い社会的団結力を維持してきた人びとである．そうした人びとも，圧倒的な力を有するイギリス植民地政府に対して太刀打ちできなかったのはいうまでも無い．植民地政府は，「部族」の概念を押しつけてキプシギス人を特定の領域に閉じ込め，英軍の懲罰遠征で家畜を掠奪し，農業適地を奪ってヨーロッパ人を入植させ，人びとを現金経済に組み込んでいった．その後の社会変化において，著者がとくに注目したのは，「言葉」，「法」，「時間」，「生活」，「挨拶」，「イニシエーション」という諸側面をめぐる行動の史的動態である．そもそも，強烈な統治者のいない社会の統制システムを紹介した“*African Political Systems*”［Fortes and Evans-Pritchard 1940］が，構造＝機能主義的で静態的な描写にとどまったのに対して，著者は歴史過程を重視した動態的なアフリカ研究を目指したと述べている（pp. 12-14）．キプシギス人社会の基礎的研究が薄いなかで，著者はゼロポイントと

* 聖心女子大学人間関係学科